

本日の学び テーマ：「イエスの服に触れる女」テキスト：マルコ5章25節-34節

【理解の手がかりとして】

今課のテキストの前後には、ゲラサの地にあって「孤独」であった一人の人が救われた話（5:1-20）と会堂長ヤイロの娘の蘇生の話（5:21-24、35-43）がある。今テキストの出来事はそのヤイロの娘の話に挟まれる形で報じられている。

つくづく、イエス様の公生涯は、そのような孤独や病の中で苦しむ一人ひとりとの出会い（憐みに基づく関り）と救いの出来事に満ちていると思わされる。

さて、今回の主人公（イエス様と出会い救われた一人の物語の当事者）は「十二年間出血の止まらない状態で苦しんできた女性」である。彼女が置かれていた状況は「多くの医者にかかって、ひどく苦しめられ、全財産を使い果たしても何の役にも立たず、ますます悪くなる」（5:26）といった大変痛ましい状況であった。

『聖書の女性 新約篇』（カイパー著 中村妙子訳）という本がある。著者アブラハム・カイパーについて、同訳者は次のように紹介している。「アブラハム・カイパーは 1837 年オランダに生まれた。父の志をつぎ、若くして牧師となったが、のち政界に投じて国会議員となり、1899 年には輿望をになって首相に就任、キリスト者のみの内閣を組織した。彼は雄弁な説教者であるとともに、忠実な聖書研究者、戦闘的な教会改革者、有能な政界指導者であった。・・・1920 年、彼が 83 歳の生涯を閉じた時、国民はこぞってこの戦える使徒を追慕したのであった。・・・『すべての男女、富める者、貧しき者、弱き者、強き者、賢き者、賢からざる者は皆ひとしく神に創られたる者であり、喪われたる罪人であって、なんびとといえども他を支配するの権を有しない。われらは神の前には同権であって、その間には高下の差を持たないのである』（『聖書の女性 旧約篇』より）。

後段の『』内に著者カイパーの思想を見る。大変優れた人権感覚である。そしてそのような思想のもとに、『聖書』の時代に社会的権限を小さくされた「女性」に光を当てて、洞察深く展開されたのが『聖書の女性』二巻ものである。以下に、今テキストの「十二年間出血の止まらない状態で苦しんできた女性」に関する彼の洞察を列挙する。

- 婦人たちの苦しみは、・・・はなはだしいものであった。世間態をはばかり、多くの場合、病状を秘密にしておかなくてはならないため、苦しみはいっそうはげしいものとなった。・・・この（テキストの）記述はこうした秘められた苦痛になやむ一人の婦人が、いかにしてキリストに直接接したか、その間のいきさつを物語っている。
- 彼女がどんなに青ざめ、やつれた婦人であったか、たやすく想像できると思う。あなたがたはまた彼女の信仰がいかに強かったか、理解できよう。そうでもなかったなら、そんな病身で群集の間にまじるなどという勇氣はとても持ち合わせなかつたであろうから。
- けれども彼女はそれについておおっぴらにイエスに訴える気になれなかった。彼女はおのが身を恥じていた。だからこそ、こっそりイエスの後をつけて、できればその御衣の裾にさわろうと決心したのであった。信仰から出たこの行為のゆえに、イエスか

ら力が発した。イエスはそれとお気づきになった。女はたちどころにいやされ、さしもの長血がついにとまったのであった。

- この婦人の信仰は、彼女が多年の間経験してきた失望のゆえに、いっそう注目に値する。・・・実際この女性が希望というものをことごとく失って、不平をもらしつつ運命に身を任せたとしても、何の不思議もなかったのである。けれども信仰は、絶望が彼女を支配することを妨げた。神の恵みがそうした信仰を彼女の心のうちに成就した。だから彼女はイエスのもとにおもむいたのである。
- 信仰にうながされて彼女は、苦痛を軽減するために神の与えたもうたあらゆる賜物を利用した。神の定められた世のつねの手段を通じて、神の御前に恵みを得んものと、あらゆる手だてを試みた。が、医術の助けが失敗したときにも、信仰ゆえに望みを失わず、その手を全能の主の手にさしのべつづけた。
- わたしたちの仲だちであるキリストは、苦しむ者をことごとく救うことによってではなく、絶望を妨げることによって、かかる信仰に報いたもう。苦しむ者にわたしたちの神のあわれみを望ませ、その信仰をよみしたもうのである。

このカイパーの洞察から示されることは、「信仰とは神の憐みに絶望しないこと」と言えるのではないか。「神は必ずやわたしを憐れんでくださる」との望み、その信仰（主への絶対的信頼）を主は喜ばれた。だから主は言われたのであろう。「あなたの信仰があなたを救った」（5:34）と。

（聖書教育より）

「『あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい』というイエスさまの言葉が、どんな時も彼女の人生と共にあり、繰り返し彼女を支え、励まし、いやし、救い、希望の光を灯し続けたはずです。『それでもなお、イエスさまが共におられる』と信じるその時、この希望と共に生きようとするその時、どのような形であれ何度でも、救いの出来事が始まっていきます。」（聖書の学び～あなたの信仰があなたを救った）